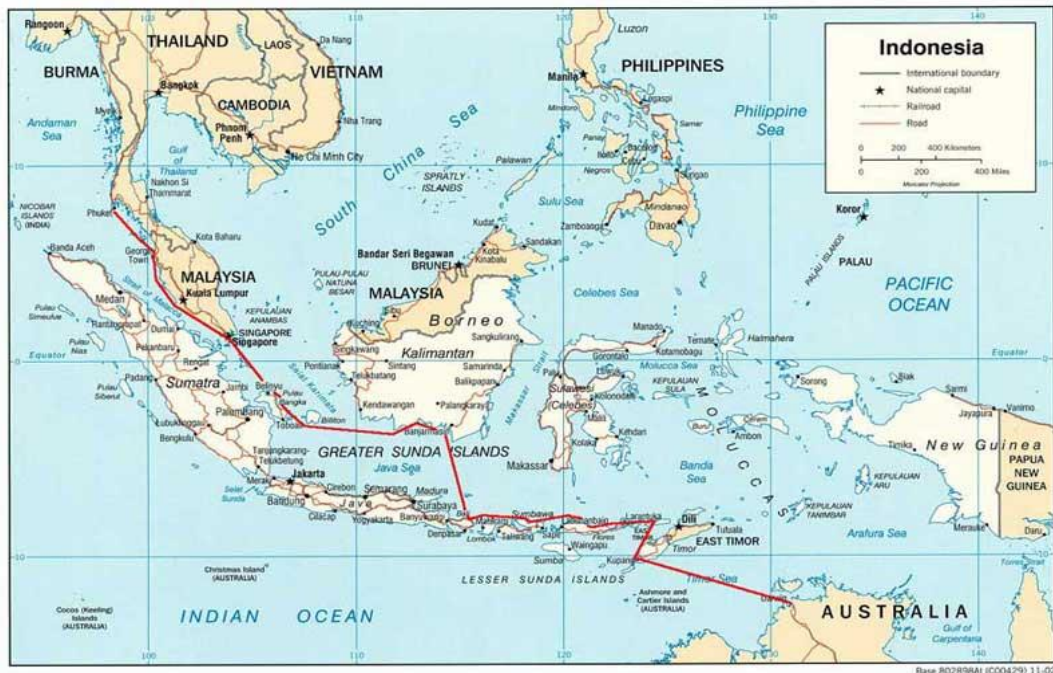


ともにトラウマを越えて ～ オランダ、日本、そしてインドネシア



オランダから、二つの手記をシェアしたいと思います。

アジアにおける第二次世界大戦（太平洋戦争）はこの二人の人生に深い傷を残しました。

タブーとして封印することなく、心を開いて話し、歴史を知り、そして他者の痛みを分かち合うことでこそ、かつて分かれていた人々を結び付け、新たな、明るい未来を共に創る機会が与えられるのではないのでしょうか。

この三国の民族は、かつて歴史において「加害者・被害者」、あるいは「植民地占領者、被占領者」として向き合い、対立していました。しかし、この二元的な発想を越えていくことができると信じます。

「足枷」としての歴史や文化の違いを越えて。互いに傷つけあうことのない、また不正義のない未来、開かれた心と共感に基づいた、優しさと相互理解に満ちた世界を共に創るために、越えてゆかなければならない時に来ていると感じます。

最初の手記は、日本占領下のインドネシアで、日本の強制収容所で幼児期の数年間を過ごしたオランダ人女性の手記です。フォーカシングという身体を通した自己理解・セラピーを通して、他ならぬ日本人とともにトラウマを分かち合うことで乗り越えたというお話です。二元的対立を越えていくことができるという感動的な証言です。

「ジョージヌの戦時の子供時代」

(日本フォーカシング協会ウェブサイトより転載)



ご関心のある方は、下記のリンクをクリックするとこの手記が収録された論文全部が読めます。

<https://goo.gl/eVmkVP> 論文名：「文化間コミュニケーション:新しい関わり方のモデル」、著者：ドラリー・グリンドラー・コトナー、エドガルド・リヴェロス、ルーシー・パウワーズ、ジョシーヌ・ヴァン・ノルド

上記の他に、二つの手記が読めます。一つはチリの方、もう一つはオランダ生まれでカナダ人の方。

いかに彼らの「戦争」の傷と向き合ったか、そして文化間のコミュニケーションを通して癒しが起こったか、大変興味深い心動かされるお話ばかりです。

二つ目の手記はインドネシアのモルック地方アンボン島出身の女性のもので、戦後オランダで生まれたにもかかわらず、ご両親の戦争体験と戦後の政治状況のため彼女の人生も大きく揺さぶられました。この歴史の暗部の次世代への影響は、オランダ政府からは隠され、社会では十分な注意がはられないまま長い時間が過ぎていきました。

理解されない悲しみを知っているからこそ他者を理解したいという望みは強く、痛みを経験したからこそ平和と癒しに満ちた世界への心からの祈願は深い。それが伝わってきます。

秘められた話は聞かれることを、隠された深淵は見つけられることを望んでいます。光へと転換しうるために。明るき未来のために。

「私の「戦争体験」」

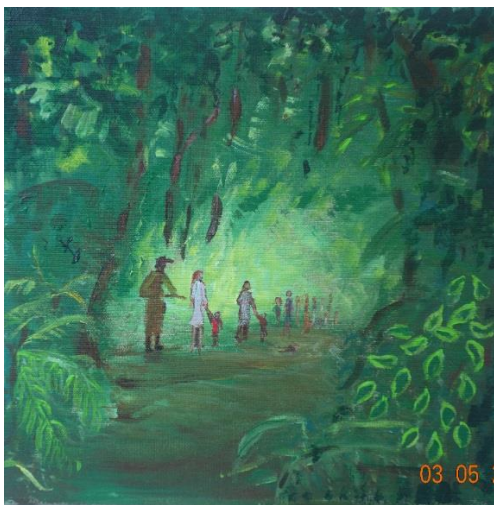
多くの皆さんに読んでいただくことで、それぞれの場所で、聞き手を探して彷徨っている痛みを共に分かち合う機会が一つでも多く生まれます様に...

「過去に目を閉じる者は現在にも盲目となります」

(「荒れ野の40年」より 1985年戦後40年におけるヴァイゼッカー大統領の演説)

*演説全文は <http://qoo.ql/piKsXb>

未来も同じ
互いに罪を責めるためにではなく
痛みを分かち合うために
傷の癒しと和解のために祈り
平和と幸福な未来を共に創造するために
この星
私たち全ての
唯一の住むべきところ
地球という名の



ジョシーヌの戦時の子ども時代

ジョシーヌ・ヴァン・ノルド

(翻訳：日笠 摩子)

(トラウマ経験のある) 皆様へ

この話は、フォーカシング・ディスカッション・リストに書いたものを、フオリオの記事とすることを勧められてまとめたものである。

第二次世界大戦前、オランダは経済不況だった。私の父は、工科大学で技師になる勉強をした後、当時オランダの植民地だったインドネシアへの移住を決断した。父はオランダ語とインドネシア語と英語がしゃべれたので、難なくアメリカ企業シンガー・ミシン会社に職を得た。

1941年に日本がハワイのアメリカ軍基地、真珠湾を攻撃したとき、私の父や母の兄を含め近所の男たちはすべて、タイやビルマに送られ、死の鉄道建設の仕事させられた。それはタイのバンコクとビルマ（現在のミャンマー）のラングーンを結ぶ258マイルの鉄道であり、第二次世界大戦中に日本陸軍が、ビルマ攻撃にあたる部隊を支援するために建設したものである。それは強制労働によって建設されたのである。

ジャングルの中の鉄道建設には、20万人のアジア人労働者と6万人の戦争捕虜(POWs)の投入された。そして母は、スマトラの捕虜収容所に連行され、私たちはそこで生活した。最初は街の周辺にいたが、後には、見捨てられたゴム農園の中のジャングルの真ん中に写された。多くの赤ん坊が死んだ。私が生き延びたのは、2歳に近くになるまで母乳を与え続けていたからだろう。私たちは皆、収容所に入った最初から最後の日（それは3年半後のことだった）まで、赤痢に苦められた。女たちも日本人のために働くことを強制された。木を切らされた。あるいは、針もほとんどないところで綿の布団を作らされ、針をなくすと殴られた。母は、日本人将校の命令により、韓国の兵士に銃で殴られた。私の父と母の兄は、捕虜収容所から、日本人のためにビルマで死の鉄道の建設工事に携わらされた。私たちは皆、ひどい病気にかかり、ほとんど餓死状態だった。

戦後私は、スマトラの端から端まで移動させられた。多くのインドネシア人が私たちに殺そうとした。自由を得るための戦争がまだ続いていたからである。私たちを守ってくれたのはグルカ（インドから来た頭に白いターバンを巻いた兵士たち）だった。すべてが非常に混乱していた。私たちは結局バンコクにたどり着き、そこで私は、5歳にして、人生はじめての楽な年を過ごした。もちろん、私たちはすべてを失っていた。家も、家財道具も、家族の写真も失った。

戦後の混乱期に、私たちはオランダに帰らざるをえなかった。そこには住む場所すらなかった。私はまったく見知らぬ人々と一緒に部屋で眠り、仕事を始めた母は、ダンスの中で2年間眠った。私たちは自分の服すら持っていなかった。2部屋を借りられるようになると、生き延びた人々が訪ねてきた。私たちは一緒に食事をし、トラウマを受けた大人たちがお互いに恐ろしい話をするのを私も聞くのが常だった。それはしばしばおもしろおかしく語られた。オランダで私が行った小学校の学級の半分は、インドネシアからの帰還者だったが、誰もそれを配慮してくれる人はいなかった。実際、そのことは話さないのが一番だった。それは酷い体験だったが、それをかいくぐってきた人があまりに多いので、それを正常だと思っていた。もう少し上の世代の人々は戦争について冗談は言うものの、子どもにそのことを説明してくれようとはしなかった。私は生き延びたものの、インドネシアに住んでいた人は皆、日本人を憎んでいた。そして、日本の製品などを買おうとはしなかった。

ずっと以前、レストランで日本人男性たちが話をしているのを耳にした。そのとき突然私はひどく不快になり、レストランを出ざるをえなかった。

しかし、私は山あり谷ありしながらもどうにか生き延びた。最後の仕上げは、マルタ・スタッパートとの退行療法だった。それによって私は捕虜収容所に連れ戻された。彼女はフォーカシングを勧めてくれた。しかし、アン・ワイザー・コーネルのワークショップで、最初に日本女性とちゃんと出会ったとき、私はまだ不快感を強く感じていた。私は彼女を2日間避け続けたが、その後彼女がとても親切な人であるとわかり、私は自分が恥ずかしくなった。だから私は彼女を自宅に招待した。彼女は来てくれたが、私は彼女を困らせたくなかった。過去の話はしなかった。その後私はアイルランドでのフォーカシング国際会議に参加した。そこで私は二人の日本女性と一緒にホームグループになった。彼女たちは私よりも若く、私は大好きになった。しかし、自分の過去はあまりにつらく、そこでも話をしないことにしようと決めた。

私たちのホームグループ二日目、私はまだそれについて話したくなかった。しかし、これは彼女たちに何か不公平だという感じが、セッション中にだんだんと強くなってきた。そこで、そのセッションが終わって皆が立ち上がろうとしていたとき、私は立って発言した。「話さなくてはいけないことがあります。」そして、状況を全部皆に話して、泣き出した。皆がとても優しくかったからである。そして、皆が立って、私の周りに腕を回してくれ、皆で泣き合った。私は、世界の狂気と、すべての、現在も過去も含めて、起こっている戦争に泣いた。その後私は幸せになり、軽くなった。

昼食後に日本女性の一人が私のところにきて、フォーカシングのセッションを誘ってくれた。私は彼女が私を選んでくれたことを名誉に感じた。私とフォーカシングしている間、彼女にとってとても悲しいことが出てきた。私はそのプロセスについていくことができ、彼女が私を緩めてくれているのを感じていた。それは、彼女の側でも同様だったらしい。この気づきを分かち合うことはすばらしい体験だった。大事なものは、優しくしてくれる人に優しくすることだけなのである。その思いを私は今も感じている。そう思うことで私は、まだ捕虜収容所のトラウマを引きつり、まだ日本人を許せない古い友人を失った。彼女は、私をとても無知な人間のように扱った。そうなるまでにどれだけ大変な取り組みがあったかは理解してくれなかった。

2004年のコスタリカのフォーカシング国際会議で、私は日本人男性と短いフォーカシングセッションをした。セッションの途中で目を開けたら、彼の顔は私の顔のすぐそばにあった。そして、私の可哀想な、亡くなった母を思った。彼女に私を見てほしかった。私は日本のフォーカサーたちに感謝を感じている。彼らの態度によって、私は、過去の重荷を、長い間私が抱え続けたトラウマを、多くのエネルギーを奪ってきたトラウマを捨てることができた。

フォーカシングを通して私が学んだのは、真実はないということである。誰もが皆それぞれの真実を持っており、これぞ唯一の「真実」はないということ学んだ。あなたがあなたの真実に何をすることが、重要であり、それは日本の人々にも言えることである。広島への原爆投下は、死にかけていた私たちの命を救ってくれたが、私が出会った若い日本人の祖父母は、そのために命を奪われたのである。

フォーカシングを通して出会った日本人がどれほど親切で丁寧かを知るには時間がかかった。日本人たちは「芯のある親切さ」を持っていた。それがわかって、私は自分の昔の考え方を捨てることができた。オランダでの国際会議で2人の若い日本の心理士と一緒に撮った写真を何枚か持っている。この写真を見て私が感じるの、自信である。大丈夫であるという自信。善意の人々の出身地はまったく関係ないという自信である。大事なものは、彼らがそこにいるということ、あなたの目の前にいるということである。¹

¹ Cross-Cultural Communication: A Model for a New Pattern of Relating: An Application of Stopped Process, Leafing, and Crossing
文化間コミュニケーション:新しい関わり方のモデル:止まったプロセス、リーフィング、交差の適用
Doralee Grindler Katonah, Psy.D., M.Div. Edgardo Riveros, Ph.D., Lucy Bowers, Josine van Noord 翻訳:日笠摩子
<https://focusing.jp/areamanagement/wp-content/uploads/2014/01/folio20-1doralee.pdf> より転載

私の「戦争体験」

ヤコミン・タハパリ

私の名前はヤコミン・タハパリといいます。両親がインドネシアのモルック地方出身で、私はオランダで生まれ育ちました。直接の戦争体験はありませんが、でも皆さんにこのお話しをしたいと思います。

1 インドネシアからオランダへ

オランダ領インドネシアの日本軍による占領は、インドネシアにおけるオランダの植民地支配の歴史の終焉の「はじまり」を意味するものでした。それにより社会の中に変化が起こり、以前では考えられなかったインドネシア自身による革命を可能にしたからです。

オランダ本国はドイツによる占領により、日本帝国陸軍に対し植民地を守る力が残っていませんでした。ボルネオ島への襲撃から3か月も経たないうちにオランダ軍は敗戦、347年(1602 - 1949)に渡るインドネシアのオランダ支配が終わったのです。

しかしインドネシアの大部分は1945年8月日本の降伏まで日本軍に占領されたままで、多くの人が強制労働に服さなければなりませんでした。

1945年にスカルノが政権を握り、1949年にオランダから正式に独立承認されました。50年代に入ってから全てのオランダ人と同調者(シンパ)はインドネシアから退去しなければならなくなりました。モルック人の父はオランダ・インドネシア王国軍に奉仕していました。

軍に所属していた他のモルック人約1万2千と共に、3か月という約束でオランダへ送還され、オランダ経由で再度モルック(アンボン島)へ送り返される筈でした。

(*戦後オランダ政府は、インドネシアと交渉してモルック人の住むアンボン島を独立させることを約束しましたが実現しませんでした。訳者注。以後訳者注は*で示す)

私はこの旅を世界で一番安全な場所、母のお腹のなかで経験しました。1951年3月24日ピロクから出発した時母は妊娠3か月、ロッテルダム港到着は4月25日、私はその年の9月28日に生まれました。

幼児期の記憶として、しょっちゅう引っ越ししたことを覚えています。その時は勿論知りませんが、住んでいたのはかつての強制収容所でした。父は働くことを許されず僅かなお金(一人1,5フローリン、子供はもっと少ない)を受けながら、食事は無料給食所でもらうというような生活でした。当時は栄養失調が蔓延し、こちらの食事が合わなかったため赤ちゃんも多く亡くなったことを後から両親に聞きました。気候や言葉の違いなども生きていくこと厳しいものになりました。

父は軍人としてオランダに来ましたが、船から降りた途端に読めないオランダ語で突然解雇の手紙をもらい「市民」となってしまう、約束の3か月はあっという間に過ぎていしまいました。初めの頃は、父と他の男性達は抗議をし署名を集めましたが、この決定を覆すことは出来ないのは明らかでした。

フラストレーションと将来の不安から、父が反抗的な態度を示すと警察に捕まり刑務所へ入れられ、家族は別の場所へ移されました。子供ながら、父の入っている刑務所をしばしば訪れたことをよく覚えています。こうして両親は生涯帰れない故郷への想いを抱きつつ生き、子供たちは幼いころからそれを共に感じながら育ちました。

キャンプ(*=前収容所)ではモルック人の伝統的な習慣を守りながら生活し、マレー語を話していました。というのも、いつ何時モルックに帰るかもしれないなかったからです。学齢期に達すると

「先生、トイレに行っていていいですか」という文章だけ教えてもらい、あとは学校の遊び場でオランダ語を学ぶといった有様でした。

子ども心にとって直接の心配ごとは無いけれど、周囲には沢山の身体的・精神的暴力があった子供時代でした。それに夜中トイレに行くと、いるはずのないユダヤ人の姿を見ることもありました。彼らは恐怖で叫んでいました。。。それ以来夜トイレにはいかず、庭で用を足したのです。その時はここ以外の世界がどんなものであるか、知る由もありませんでした。キャンプは必ず普通の社会から遠く離れた場所にあったからです。24時間の警備体制があるところもあり、時々警察に付き添われて学校へ行ったことも覚えています。

2 過去を受け継いだ世代

1961年にオランダ政府から僅かの「本国送還手当」を受け取りインドネシアに帰る機会が与えられました。モルック人の一部はそうして帰りましたが、オランダへ行っていたことから本国人たちからは「裏切り者」として見られるという悲しい結果をもたらしました。

(*彼らの不在中に、インドネシア政府によりモルック地方に他民族の移民政策が実施された為、民族間の不理解と対立の問題なども起こった。)

帰りたい父に対し、子供の将来を憂う母は帰国を拒否し、それが家庭内にまた悶着を起こします。当時のキャンプでは私達だけが後に残りました。

そんな中、1962年、私が10歳の時家族はウオルベルメーア(*アムステルダム西)に引っ越ししました。収容所ではなく、普通の住宅地です。幸せで天にも昇る気持ちでした。学校へ歩いて通える、オランダ人のように「本当の家」に住める！.....

18歳になって、看護師になる勉強を始めました。当時は寄宿制だったのですが私たちにとっては大変厳しい時勢でした。忘れもしない1970年8月31日、ハーグのインドネシア大使館が33人のモルック人の若者により占領されたのです。

その8月にオランダはインドネシアのスハルト大統領を招くことになりました。これはモルック人にとって顔面パンチを受けたようなものです。「オランダは4年前我らのリーダー、クリス・スモキルを銃殺する命令を下した独裁者を招待する。話し合いではもう何も起こらない」と若者たちは決起を決意した理由を後に明らかにしました。

戦後オランダに送還後、長年にわたる失業と失望、そして将来の展望の欠如というモルック人が予想だにできなかった状況が私たちを待っていました。独立共和国を創建し帰国するという政府の約束を裏切られた両親の世代の失望と、周囲から理解されない苦しみや悲しみをこの若者たちは受け継いだのでした。この二世の世代の多くがその後癌をわずらうのを看護師として身近に経験もしました。

この事件のため同級生からは受け入れられず、患者さんのうちでも世話をされることを拒否する人が出てきました。そして同胞からは「裏切り者」として見られました>(*寄宿のためモルック人の集まった住宅地を出て行ったため)この出来事をきっかけに、歴史に関心を持ち始め父に色々話も聞きました。そして人生が自分の考えていたのとは全く違ったものであることを発見したので

す。同年の12月オランダ北部で列車のハイジャック、7年後の1970年にも別のモルック人たちによる列車のハイジャック事件が起こり世間を騒がせます。

この当時は地獄のような人生でした。仕事も住まいも見つけるのが困難で、患者さんから拒否されたり、お店にはいれば人々が出ていくというようなことがしばしば起こりました。それは私だけでなく他の有色人種の人にも起こりました。

もう一つ例は電車の中、ある日ユトレヒトに友人と誕生日会に行く途中のことでした。私はプレゼントの大きなタバコの木を抱えていました。出発した電車が突然駅の構外で止まり、私たちは電車から退去を求められました。私は地面に横になることを強制され、タバコの木は「危険物検査のため」めちゃくちゃにされました。何という屈辱だったでしょう！

3 ト라우マをを超えて

そんな経験のずっと後のこと、2004年のタイの津波のニュースを見た時、私の頭の中で何かが起こりました。突然狂気に襲われたたようになり、数日間記憶喪失だったことを覚えています。とても恐ろしい気持ちでした。様々な心身の不調が起こり、友人がグループ40/45（*戦争体験のトラウマを持つ方たちのセラピーグループ）に申し込むことを薦めてくれました。直接の戦争体験が無い為最初は躊躇しましたが、恐怖症のような状態が続き極度の湿疹もあったので、やはり行くことにしました。

インテークの時、PTSD（心的外傷後ストレス障害）と診断され、1年以上にわたって週一回様々な心理療法を受けました。どれ程多くのことが心の奥底に隠れていたのかを発見することは大変強烈な経験でした。後から考えてみると、これは私にとっての大きな贈り物でした。そのあとも、断続的にですが何年もセラピーを重ね、そのおかげで今の私があります。

私は全く異なった二つの世界の子供でした。小さなときから、無意識のうちに両親の痛みと断ちがたい故郷への思いを胸に育ちました。大人になる過程でそれを理解し、心の中に場所を与えることが出来ました。

2010年母が亡くなり、2年後父が亡くなった年、2012年の12月に兄弟姉妹で両親の遺骨を彼らの心から愛するインドネシアに持って帰り、家族の墓に埋葬しました。

やっと両親の痛みと悲しみを肩から下ろしたように思いました。その時から、心が自由になったような気がしました。やっと自分らしく、わたし自身でありえる！と。

神の愛はこの世界に満ちています。

でもそれをこの地上に実現させる、人間相互の理解とコミュニケーションは、まだまだあちこちで足りません。

それを少しでも実現するため、私も小さな貢献をしたいと思い、このお話をさせていただきました。

2015年7月